

『松下理念研究部 新発見伝(二)』 『歩一會会誌』を繙く

松下理念研究部長 佐藤 悌二郎

今回繙いたのは、『松下電器歩一會会誌』。歩一會(はいちかい)については、少し説明を要しよう。これは、松下電器器具製作所¹が創業されてちょうど丸二年経った大正九年(一九二〇)三月に、従業員²の福利増進、融和親睦を図る機関として組織された一種の親睦団体である。³松下電器の将来は全員一致の精神から、という考えの下、⁴全員が歩みを一つにし、また、歩一歩踏みしめて着実に進んでいこう⁵、という意味を込めて命名された。結成当初の会員は、松下所主(当時)を含む全従業員二十八名であったと記録にある。発足後、遠足や運動会など、さまざまな行事が行われ、松下電器の業容の拡大とともに、活発に活動が展開されたが、昭和二十一年(一九四六)一月、労働組合結成に伴って解散することとなった。

『歩一會会誌』は、この歩一會の会員相互の親睦交流を増進する目的で、昭和二年(一九二七)末に発刊されたものである。昭和七年(一九三二)から月刊となり、戦時中も、困難な情勢のなかで、ときに「二、三、四、五月合併号」といった形での発刊を余儀なくされたが、昭和二十年(一九四五)まで継続発刊されている。誌面は製品の常識講座や会員の随筆、詩歌、創作等の文芸欄など、多くは会員の投稿からなっており、巻頭に、松下所主の所感や、歩一會会員、すなわち松下電器の全従業員に向けてのメッセージがほぼ毎号掲載されていた。『私の行き方考え方』の原作となった、松下幸之助・自叙伝⁶も、昭和十年(一九三五)から十九年(一九四四)まで連載されている。

今回は、この『会誌』を繙いたなかから、新たな発見を二点紹介しよう。

いつソケットの製造を始めたのか

まず、一点目は、ソケットの製造を始めた日である。

松下幸之助は、大正六年(一九一七)六月、大阪電燈株式会社を依願退職し、およそ六年八カ月にわたる工員生活に別れを告げた。松下電器社史室編纂による『松下電器・社史年表』では、

・大正六年六月 幸之助、大阪電燈(株)を依願退職
・大正六年六月 幸之助、自ら考案のソケットの製造を決意
東成郡(現、大阪市生野区)猪飼野の借家で、義弟井植歳男他一名とともに手元資金百円弱でその準備に着手
・大正六年十月 ソケットの販売を開始したが、ほとんど売れず不成功に終わる
とある。

『私の行き方考え方』によれば、六月十五日に辞表を提出し、二十日に退職したという(但し、残存する「退職辞令」の日付は七月十九日付、退職手当辞令「も七月三十一日付になっている。このあたりの日にちのずれについては、拙著『松下幸之助・成功への軌跡』で疑問を呈したが、理由はなお不明である)。

そして『私の行き方考え方』には、退職してからソケットを製造するまでの経緯や準備の様子が縷々語られ、「どうにかその年(大正六年)の十月のころ、目的のソケットが少数ではあるが出来上がった」とある。しかし、いつソケットの製造に着手したかという正確な日にちが、『私の行き方考え方』には明示されていないのである。

『松下電器五十年の略史』(昭和四十三年)でも、「大正六年六月二十日、六年間勤めた電燈会社を退職した。……幸之助は電燈会社を退職すると同時にソケットの製造準備を始めた」という記述の後に、製造販売に至るまでの経緯が綴られているが、そこにもソケットの製造に着手した日にちは示されていない。

ところが、『歩一會会誌』の昭和十八年六月号に、「松下電器創業二十五年の懐古」と銘打った記事が社主松下幸之助名で掲載され、そのなかで、電器器具製作の一大決心を以て七年間勤務した大阪電燈株式会社を退社し、大阪市外猪飼野でささやかな工場を持つてソケットの製作を始めたのが大正六

年八月十一日である。十月の始めに目的のソケットが出来販売の第一歩を踏み出した……」とあり、製造を開始した日が大正六年の八月十一日であったことが、はっきり記されているのである。

これまで、日にちが明記された史料が見あたらなかっただけに、これは一つの新たな発見であった。

命知元年の全店員数は

もう一つの新たな発見は、第一回創業記念式典挙行時の店員数である。『私の行き方考え方』には、「私はこの真使命闡明の佳き日を男子の節句たる五月五日に定めた。私は昭和七年のその日午前十時、全店員を大阪中央電気倶楽部の講堂に招集した。会するもの、井植、亀山をはじめ出席人員百六十八名、定刻には全員顔をそろえ……」とある。

ところが、さきの松下社主による「松下電器創業二十五年の懐古」には、つぎのような記述がある。

昭和七年五月五日……松下電器創業記念日制定発会式挙行出席者百六十名

尚当日を下し職制の大改革を行ふ
当時の陣容

店員 二二六名
職工 一〇三〇名

店員と職工を合せると、二二六名となるが、前掲の『松下電器・社史年表』でも、この五月五日時点の従業員数は二二六名になっている。このことから、「懐古」にある従業員総数は根拠のあるものであり、まず間違いのない数字と思われる。したがって、店員と職工数についても、信頼性が高いと考えるべきであろう。

となると、『私の行き方考え方』の「全店員一六八名」という数字が怪しくなってくる。この数字の根拠、出所はどこなのか。これについてはさらに調べなければならない。

『歩一會会誌』には、いま挙げた二つ以外にもまだ、「ナショナルランブ」の考案の時期など、いくつかの新たな発見があったが、それらについては、またの機会に紹介したい。